



建学の精神

ミッションステートメント

関西学院は、キリスト教主義に基づく「学びと探究の共同体」として、ここに集うすべての者が生涯をかけて取り組む人生の目標を見出せるよう導き、思いやりと高潔さをもって社会を変革することにより、スクールモットー“Mastery for Service”を体現する、創造的かつ有能な世界市民を育てることを使命とする。

スクールモットー“Mastery for Service”

関西学院のスクールモットー“Mastery for Service”は、「奉仕のための練達」と訳され、隣人・社会・世界に仕えるため自らを鍛えるという関学人のあり方を示しています。

めざす人間像

世界を視野におさめ、他者への思いやりと社会変革への気概を持ち、高い識見と倫理観を備えて自己を確立し、自らの大きな志をもって行動力を発揮する人。



関西学院 校章・マーク
新月が満月へと刻々と変化するように、学ぶ者すべてが日々進歩と成長の過程にあることを意味しています。また、月が太陽の光を受けて暗い夜を照らすように、神の恵みを受けて世の中を明るくしていきたいとの思いを表わしています。

学校法人 関西学院

〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155

TEL : 0798-54-6017 FAX : 0798-51-0912



創立

2009年(平成21)関西学院は創立120周年にあたり、21世紀に向けてのミッションステートメントを策定、公表しました。それは「Mastery for Serviceを体現する世界市民を育て」と要約されますが、その要約こそ学院史に立ち返りつつ学院の現在、そして未来を問い続けることを、構成員に対して促し続けるものとなっています。

世界市民(World Citizen)とは、学院創立者にして初代院長となったウォルター・ラッセル・ランバスの生涯を記念する碑文に記された言葉です。彼の両親ジェイムズとメアリーは、アメリカ南メソジスト監督教会の宣教師として、中国・上海を拠点とした伝道活動に従事していました。上海で生まれたウォルターは、少年時代を過ごしたのち、アメリカで医学と神学を修め、宣教師として父のもとに戻りました。その後、日本宣教のため1886年(明治19)両親ともども神戸に着任しています。当時アメリカメソジスト教会としては、東京を中心とした北メソジスト教会が活動を進めており、ランバスたちはそれを補完する意味で西日本への宣教活動を意図するものでした。

ランバス父子を中心とする南メソジスト教会の伝道活動は、開港地神戸を拠点として瀬戸内海沿岸に、大分、中津、松山、八幡浜、広島などで展開されましたが、教会設立と並んで教育機関の設置も精力的に行ない、広島における広島女学院、神戸におけるバルモア学院、啓明学院、関西学院、さらに大阪におけるランバス女学院などが設置されていきました。ウォルター自身は、1889年(明治22)の関西学院設立後、数年を経ずしてアメリカの教会本部への転任を命ぜられ、その後、南極とオセアニアを除くすべての大陸に足跡を残すことになるWorld Missionに邁進しました。彼の名を冠した教育機関は、現在も南北アメリカ、ロシアなどにも見られます。そして、その伝道活動の途中にたまたま寄港した横浜で病に倒れ没することになりました。19世紀末から20世紀初頭、世界全体がナショナリズム化への傾斜を強める時代に、常に世界的な視野の中で自らのミッションを見出し、それに取り組み続けるウォルターの姿勢こそ、「World is My Parish」としたメソジスト派の創始者ジョン・ウェスレーのビジョンに重なり合うものでしょう。

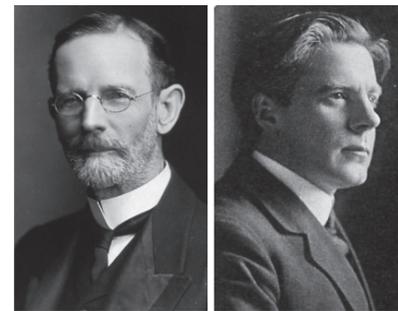
創立の背景と歴史

ランバスが学院を去ったのち、関西学院のみならず多くのキリスト教主義学校が文部省の「訓令第12号」によって大きな試練に向かい合うことになりました。カナダメソジスト教会は、当時、東京及び東日本を中心として学校教育を伴う宣教活動を行なっていましたが、訓令を契機としてその範囲を関西にも移し、関西学院の経営に参画することとなりました。当時の関西学院は、なお私塾的な存在にすぎませんでしたが、認定学校としての在り方を志向していた状況であり、訓令は大きなハードルとなりました。ランバスに次いで第2代院長となった吉岡美国は「聖書と礼拝なくして学院なし」と未認定学校としての存在を主張しましたが、現実問題として生徒数の減少など、学院の存立にとって危機的状況を迎えつつありました。関西学院の経営に参画したベーツを代表とするカナダメソジスト教会の宣教師たちは、日本社会全体が経済的な発展への動きを見せ始め、さらに開港地神戸という学院の立地条件を考慮し、それまでの神学部、中学部に加えて、ビジネススクールを軸とする高等教育課程の設置を目指しました。その動きが社会に受け入れられ、文部省もキリスト教教育を黙認する形で、関西学院に高等学校の設置を認め(学院で最初の高等教育組織として文部省認可を得たのは神学部)、創立20周年を契機に、学院は高等教育機関としての飛躍への歩みを開始しました。

このときカナダメソジスト教会宣教師として代表的な役割を果たしたのがベーツでした。1902年(明治35)トロントで開催された学生宣教義勇軍大会に参加して海外宣教への志を抱いたベーツは、将来、カナダ政界での指導的役割も囑望されましたが、宣教師として日本に赴任。甲府や東京などで伝道に従事しました。やがて関西学院に着任し、高等教育機関としての学院の歩みを指導、高等学部開設とともに学部長に就任しました。日本の高等教育が、個人の立身出世への道筋をつけるものになりつつある中で、関西学院においては自らの成長は隣人に仕える業をなすためのものであり、その原像としてのイエスの存在を想起させるものでもあり、商科の学生たちを中心として“Mastery for Service”を提唱。ベーツが第4代院長に就任することで、“Mastery for Service”は学院のモットーとして受け継がれていきました。

ベーツの働きは、やがて大学昇格の機運の高まりを招き、1929年(昭和4)キャンパスを学院発祥の地である神戸・原田から現在の主キャンパスとなる西宮・上ヶ原に移転。1934年(昭和9)ベーツは関西学院大学の設立と同時に初代学長に就任しました。新キャンパス全体の設計はW・M・ヴォーリズが行ない、現在も彼の代表的な作品として知られています。興味深いことにベーツとヴォーリズは、学生宣教義勇軍大会に参加して外国宣教への決意を抱いた盟友で、原田キャンパスの神学館をはじめ、ほぼすべての建築をヴォーリズが担っている背景には、二人の青年時代からの深い交友があったといわれています。

ランバスとベーツは、「神と隣人とに仕える」というキリスト教主義教育の原点となる生き方を実践しました。関西学院にとって、単に歴代院長の一人としてのみ語られる存在ではなく、将来にわたって学院教育のあるべき方向性を指し示す存在として位置づけられています。



左から 創立者 W・R・ランバス(1854~1921年)「世界市民にしてキリストの使徒」として、日本滞在中は休むことなく働き、伝道地を駆け巡りました。第4代院長 C・J・L・ベーツ(1877~1963年)スクールモットー“Mastery for Service(奉仕のための練達)”を提唱しました。

